鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第48号，223－232　2018

共生社会の境界線
－自閉症スペクトラムをベイトソンの学習理論で記述する試み－

丸田　なつき

Boundary of Symbiotic Society
－An Attempt to Describe Autistic Spectrum by Bathon's Learning Theory－

Natsuki Maruta

本邦では，2014 年に障害者の権利に関する条約の批准が国際連合事務局によって承認された。これにより，「共生社会」の構築を掲げ，さまざまな領域で，共生社会に向けた法令整備が整えられた。それらは障害者を取り巻く環境だけでなく，支援体制の変革，そして支援観・障害観へも影響を及ぼすものである。今後，インクルーシブ教育が一層促進され，特別支援の役割は大きなものとなる。本論は，自閉症スペクトラムをベイトソンの学習理論を通して考察することで，既存の障害観や支援観について，違う見方を提案するものである。

Key Words:「障害者支援」「自閉症スペクトラム」「学習理論」「家族療法」「特別支援」

（Received September 11 2017）

1. はじめに

2006年に国連総会において，障害者の権利に関する条約（障害者権利条約）が採択された。それを受けて本邦は，国内法令の整備を推し進め（2011年障害者基本法改正，2012年障害者総合支援法成立，2013年障害者差別解消法成立・障害者雇用促進法改正），2014年1月20日付で障害者権利条約の批准が承認された。これらの動きの背景には「障害者などが積極的に社会貢献していく『共生社会』の構築」が掲げられており，さまざまな領域で，共生社会に向けた法令整備が整えられたのである。例えば，2013年に学校教育法施行令が一部改正され，障害のある児童生徒の就学先選択の仕組みに修正が加えられた。これにより従来，障害のある児童生徒は特別支援学校への就学が原則とされていたが，改正後は，障害の状況等を踏まえ，市町村の教育委員会が，就学先を選択することが可能となった。また，2015年の子ども・子育て支援法においても，障害児の支援につながる取組の制度化に関する事項が含まれた。それらの整備は，

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

障害者施設や事業所が，第一線で障害者支援を担っていた従来の支援体制から，一般施策のあらゆる機関が，共生するという観点から，一部支援を担っていくという支援体制の変化をもたらした。そして，それらの変化に伴い，障害をもたない多くの人々の，障害観の変化も要請することとなる。本邦では，長い間，障害者と障害を持たない一般（とされる）の社会との間に隔たりがあった。その境界線を解き放ち「障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつさまざまな人々が生き生きと活躍できる共生社会」を目指し，歩み始めたのである。

本論は，自閉症スペクトラムの考察を通して，それら障害観・支援観について問いかけることを目的としている。なぜ，自閉症スペクトラムなのかというと，自閉症スペクトラム自体の多様性と障害観の変遷が今もなお変化し続けている障害の一つだからである。既存の障害観を浮き彫りにすると共に，境界線が外れるとはどういうことなのか，その理解の一助となることを期待する。

2. 自閉症スペクトラムとは

2013年に出版されたDSM−5では，自閉症スペクトラムの診断基準として，①社会的コミュニケーションおよび相互的関係性における持続的障害，②限定された反復する様式の行動，興味，活動，の２つの領域にまとめられている。従来，ウェングの3つ組（①社会性の障害，②コミュニケーションの障害，③想像力の障害とこだわり行動・常同行動）が伝統的な評価として用いられたが，DSM−5の出版により，2つの行動領域の異常の有無や重症度によって評価される方向へと変更がなされた。併せて，2つの行動領域の異常が幼児期を過ぎて気づかれる場合もあることが明記され，「どの年齢でも発症することのある発達障害」として再定義されたのである。表1に診断基準を示す。

自閉症スペクトラムは，多くの精神疾患同様，原因が不明であり，さまざまな知見から原因論が仮定される。その為，診断に用いられるのは，行動上の問題から症状を定義する方法である。DSM−5には，７つの症状例が記載され，自閉症スペクトラムを診断する，行動上の問題と記されている（表１参照）。

これら行動上の問題（症状）の原因として，さまざまな理論が仮定されている。Baron-CoheLLeslie&Frith (1985) による『心の理論障害説』, Curcio (1978) による『共同注意障害説』, Rizzolatti, Fogassi&Gallese (2001) による『ミラーニューロン障害説』などがその代表である。さまざまな視点から，多くの仮説が示され，仮説に基づく治療が展開される。それらの仮説は，仮説の域を脱することなく，一つの仮説が隆盛しては衰退し，また別の仮説が隆盛しては衰退するといったことが繰り返されている。

一方，自閉症スペクトラムを，当事者の体験世界から記述していく試みも国内外問わず増えてきている。本邦では東田直樹の著書『自閉の僕が飛び跳ねる理由』が注目を集め，30ヵ国以上で翻訳され世界的ベストセラーとなった。東田はパソコンや文字盤ポインティングという独自のコミュニケーションツールを使うことで，実に高度な表現を用いて自閉症当事者の体験世界を露わにした（東田，2006)。それらの著書は，当然のように知覚していた社会に対する見方をも覆す視点を与えてくれるものである。竹中（2008）は，社会学の立場から，自閉症を

一つの文化として捉え，自閉症の当事者からも，普通とされる人や社会について記述され，発信されるという双方向的な理解の重要性を訴えている。竹中が著書の中で目指すのは，社会学の視点から自閉症を記述することで,既存の障害観を押し広げるところにあるように思われる。本論においても，竹中同様に，自閉症スペクトラムの社会的コミュニケーションについて，既存のコミュニケーション観を押し広げることで，既存の障害観を浮き彫りにし，支援観を捉えなおすことを目的としている。

表1　自閉症スペクトラム診断基準（DSM−5）

A．複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥があり，現時点または病歴によって，以下により明らかになる（以下の例は一例であり，網羅したものではない）

⑴　相互の対人的－情緒的関係の欠落で，例えば，対人的に異常な近づき方や通常の会話のやりとりのできないことといったものから，興味，情動，または感情を共有することの少なさ，社会的相互反応を開始したり応じたりすることができないことに及ぶ。

⑵　対人的相互反応で非言語的コミュニケーション行動を用いることの欠陥，例えば，まとまりのわるい言語的，非言語的コミュニケーションから，視線を合わせることと身振りの異常,または身振りの理解やその使用の欠陥,顔の表情や非言語的コミュニケーションの完全な欠陥に及ぶ。

⑶　人間関係を発展させ，維持し，それを理解することの欠陥で，例えば，さまざまな社会的状況に合った行動に調整することの困難さから，想像上の遊びを他者と一緒にしたり友人を作ることの困難さ，または仲間に対する興味の欠如に及ぶ。

B．行動，興味，または活動の限定された反復的な様式で，現在または病歴によって，以下の少なくとも2つにより明らかになる（以下の例は一例であり，網羅したものではない）。

⑴　常同的または反復的な身体の運動，物の使用，または会話（例：おもちゃを一列に並べたり物を叩いたりするなどの単調な常同運動，反響言語，独特な言い回し）

⑵　同一性への固執，習慣への頑ななこだわり，または言語的，非言語的な儀式的行動様式（例：小さな変化に対する極度の苦痛，移行することの困難さ，柔軟性に欠ける思考様式，儀式のようなあいさつの習慣，毎日同じ道順をたどったり，同じ食物を食べたりすることへの要求）

⑶　強度または対象において異常なほど，きわめて限定され執着する興味（例：一般的ではない対象への強い愛着または没頭，過度に限局したまたは固執した興味）

⑷　感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ，または環境の感覚的側面に対する並外れた興味（例：痛みや体温に無関心のように見える，特定の音または触感に逆の反応をする，対象を過度に嗅いだり触れたりする，光または動きを見ることに熱中する）

C．症状は発達早期に存在していなければならない（しかし社会的要求が能力の限界を超えるまでは症状は完全に明らかにならないかもしれないし，その後の生活で学んだ対

応の仕方によって隠されている場合もある）

D．その症状は，社会的，職業的，または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている。

E．これらの障害は，知的能力障害（知的発達症）または全般的発達遅滞ではうまく説明されない。知的能力障害と自閉症スペクトラム症はしばしば同時に起こり，自閉症スペクトラム症と知的能力障害の併存の診断を下すためには，社会的コミュニケーションが全般的な発達の水準から期待されるものより下回っていなければならない。

3. コミュニケーション障害の捉え方

前述のように，自閉症スペクトラムの原因として，さまざまな仮説が用いられている。多くの仮説は「社会的コミュニケーション」が困難になる理由の説明，または，2つめの中核症状である「限定された反復する様式の行動，興味，活動」が起こる説明に留まり，2つの症状の関係が曖昧である。また，2つの中核症状と行動上の問題が，連続性をもった困難と捉えられていないように思われる。そこには「社会的コミュニケーション」について，既存のコミュニケーション観である「情報の交換」という道具的理解に留まり，より行動上の問題がクローズアップされているからではないかと考えられる。

自閉症スペクトラムのコミュニケーション障害は，問題行動として治療の対象となり，様々な場所でコミュニケーション支援が展開されている。支援法として，認知・言語的アプローチや補助代替アプローチ，行動療法，インリアル・アプローチ，TEACCHプログラムなどが確立され，そこでは，コミュニケーションの方法やルールについて学ぶことが中心課題となる。自閉症スペクトラムの当事者が社会的ルールとしての道具的コミュニケーションを獲得していくことは，社会適応の部分で役立つものになりうる。一方で，道具としてのコミュニケーションツールを獲得したことで，自閉症スペクトラム当事者の困難がなくなったり，また限定された反復行動がなくなったりする訳ではない。自閉症スペクトラムの困難を理解する為には，コミュニケーションや行動の問題を自閉症スペクトラムの中に見出すのではなく，本来，双方向から成り立つコミュニケーションとして，自閉症スペクトラムとわれわれを分け隔てることなく捉えていくことが必要なのである。

4. インタラクションという視点

本論では，ベイトソンの学習理論から自閉症スペクトラムのコミュニケーション・行動について考察を試みる。グレゴリー・ベイトソンは，文化人類学を出発点として，多くの領域に影響を与えた思索家である。モリス・バーマン（1989）は「グレゴリーベイトソンこそ，デカルト的二元論を越えた科学の全体像を提示できた二十世紀最大の思想家である」と評している。

ベイトソンは哺乳類のコミュニケーションの特徴として，インタラクションという視点を見出した。そうすることによって得られた知見が，メッセージと抽象性，コンテクストが及ぼす

作用，パラドクス等である。『遊びと空想の理論』（Bateson, 1955）の中では，カワウソの遊びの観察からそれらを論じている。まず，メッセージの抽象性においては，ラッセルの論理階型論を導入し，コミュニケーションの重層構造を仮定した。コンテクストが及ぼす影響では，コミュニケーションを規定しうる上位のコミュニケーションをメタ・コミュニケーション（コンテクスト）とし「その大部分が暗黙のうちに差し出される」としている。そして，この論理階型を混同するところにパラドクスがあり，うそやふり，遊び，ユーモアが成立すると論じた。

翌年『精神分裂病の理論化に向けて』（Bateson, 1956）の中で，異なる論理階型レベルから同時に発せられる相矛盾したメッセージによって生じるダブルバインド理論を展開した。この記念碑的な論文を皮切りに，サイコセラピーは大きな転換期を迎えた。それは，病理の世界を医学の言語ではない，コミュニケーションの言語で記述する可能性を見出したからである。コミュニケーションによって記述された病理は，コミュニケーションによって治療がなされていく。そうして，システムを治療対象とする家族療法の勃興期へと突入していくのである。

ベイトソンをデレクターとした研究グループは，精神分裂病（現在の統合失調症）の家族におけるコミュニケーション研究であったが，精神分裂病に限らず，様々な精神疾患や問題がコミュニケーションの言語で記述可能なものであることを示している。それは，自閉症スペクトラムの記述も例外ではないのである。

5. ベイトソンの学習理論

学習理論については，行動科学，心理学分野では知らない人はいないと言っていい程，親しまれている理論である。学習について心理学辞典では「経験によって生じる比較的永続的な行動の変化」と定義され，有機体の変化について固体内で完結する理論的枠組みが示されている。一方，論理階型に基づくベイトソンの学習理論は，既存の学習観とは全く異なる切り口で展開されている。そこでは固体の行動の変化を捉えるその視点に，インタラクティブな視点が採用される。つまり，コミュニケーション（有機体と環境の関係性）によりパターンが形成されていく過程を，学習と捉える。そして，学習としての変化を，次元の異なる階層構造からなる多重の変化として捉えていくのである。

ベイトソンの学習観は，文化人類学者として調査研究していた初期の活動からあたためられ，最終的に『学習とコミュニケーションの階型論』（Bateson, 1972）の中で体系化された。そこでは，学習のレベルを，ゼロ学習から学習Ⅳの5段階に整理している。以下に，ベイトソンの記述をそのまま引用する。

- ＜ゼロ学習＞の特徴は，反応が一つに定まっている点にあった。その特定された反応は，正しかろうと間違っていようと，動かすことのできないものだった。
- ＜学習Ⅰ＞とは，反応が一つに定まる定まり方の変化，すなわちはじめの反応に代わる反応が所定の選択肢群のなかから選びとられる変化だった。
- ＜学習Ⅱ＞とは，＜学習Ⅰ＞の進行プロセス上の変化である。選択肢群そのものが修正される変化や，経験の連続体が区切られる，その区切られ方の変化がこれにあたる。

- ＜学習Ⅲ＞とは，＜学習Ⅱ＞の進行プロセス上の変化である。代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化である。
- ＜学習Ⅳ＞とは＜学習Ⅲ＞に生じる変化，ということになろうが，地球上に生きる（成体の）有機体が，このレベルにいきつくことはないかと思われる。

上記の通り，ベイトソンの学習理論は，反応の変化からパターン形成，行為と経験の区切ることによる体験世界とそれの変化といった壮大な理論の展開である。そして，この学習理論は，個人・社会といった対象を問わず，あらゆるシステムに適応することを可能にした。

ところで，なぜベイトソンは，学習の現象を根本から捉えなおす作業に取り掛かったのだろうか。『学習とコミュニケーションの階型論』（Bateson, 1972）の冒頭，ベイトソンは「すべての行動科学者は，過去二十五年の間にサイバネティクスがもたらした思考革命の波をかぶっている」「今日『プリンキピア・マテマティカ（ホワイトヘッドとラッセルによる数学原理)』が存在しないかのように論を進める行動科学者は，ざっと六十年の時代遅れを告白しているに等しい」と記し，行動科学者へ向けての問題提起を投げかけている。ベイトソンの根源的な問題意識は，既存の学習観の背景にある，精神と物質の分裂，二分法的思考習慣に向けられ，多くの科学がこの思考習慣から手段と目的を分断したまま展開されていることを指摘し，そしてこの思考習慣自体を相対化しなければならないというところにあると思われる。そして，この論文が書かれて半世紀が過ぎようとしている現在，当時にも増して，ベイトソンが投げかける問題について，真摯に受け止めなくてはならない状況があるのではないだろうか。

6. 自閉症スペクトラムと学習理論

ベイトソンの学習理論から自閉症スペクトラムの考察をはじめる。ゼロ学習については，シグナルを受け取るところになるので，問題なく受け取っていると思われる。また，学習Ⅳについては，有機体にはたどり着かないレベルの学習とされている為，本論では，学習Ⅰから学習Ⅲまでを取り上げる。

6－1. コンテクスト学習の障害

自閉症スペクトラムの学習Ⅰについて，反応が一つに定まる定まり方は可能である。そして，学習Ⅱであるコンテクスト学習も，独自のコンテクスト学習が成立している。では，自閉症スペクトラムの学習においては，どこに困難があるのか。そこで，コンテクスト学習の独自性に注目したい。一つ，例を示す。

ある自閉症スペクトラムの子どもに「座る時は前から詰めて座りましょう」という約束をする。子どもは，複数の座席がある中で，その時々の状況で，前から詰めて座ることを覚えたとする。ある時，電車に乗った。一番前に先客がいるだけで，電車の中は空いていた。い

つものように，先客の横に，ぴったりと前から詰めて座った。しかし，先客は不快な顔をして席を離れてしまう。

自閉症スペクトラムの当事者によく起こりがちな例だと思われる。さて，ここでは何がおこっているのだろうか。

学習Ⅰにあったって，ベイトソンはコンテクストという概念を確認している。コンテクストとは「有機体に対し，次に行うべき選択肢の選択群がどれであるかを告げる出来事に対する集合的総称（Bateson, 1972）」と定義される。例の子どもについて考えてみよう。コンテクストを手掛かりに座る位置を特定できる。そして，“前に詰めて座る”という行為は，部屋の椅子であろうと電車の座席であろうと，つまり，メタ・コンテクストの選択肢が変わっても，一定の選択をしている。このことから学習Ⅱについても成立していると思われる。しかし，この例において大多数の人は「公共の座席における座り方のマナーや礼儀」としてコンテクストを切り取る。一方，自閉症スペクトラムは独自のコンテクストの切り取り方をしているのである。ベイトソンは，この切り取り方について「正しさもなければ誤りもない。ただの『見方』であり『見え方』なのである（Bateson, 1972）」としているが，社会においては，大多数の切り取り方が正しいと認知され採用される。ここに自閉症スペクトラムの困難が現れる。自閉症スペクトラムは大多数のコンテクスト学習とは違う，独自のコンテクスト学習をしており，それが社会の中で生きにくさに繋がり，生きるうえでの障害となりうる。すなわち，ベイトソンの理論から記述すると，自閉症スペクトラムは『コンテクスト学習の障害』といえる。

6－2. 常同行動と体験世界を生きる自己

ここでは自閉症スペクトラムの症状の一つである「限定された反復する様式の行動，興味，活動」について取り上げたい。

フリス（1989）は，中枢の統合欠如説から，統合する動因を単純な繰り返し行動に向けることで，一定の秩序と理解を得て安定しているとして，常同行動を説明している。自閉症スペクトラムを「コンテクスト学習の障害」と考えると，社会的に正しいとされる秩序や暗黙の前提といった事柄について，捉えることが困難であろう。しかし，自閉症スペクトラム当事者が秩序のない世界に生きているという訳ではない。フリスのいうように，独自の秩序を行動の同一性や秩序だった幾何学模様といった世界に求め，安息を得る方法としているのではないだろうか。では，同一性や秩序がなぜ安息をもたらすのか。そこに学習Ⅱによる「自己」との関係を仮定する。

学習Ⅱにおいてベイトソンは，対人関係上での恒常的なパターンも学習の所産であることを示した。つまり，われわれが日常でよく使う「性格」といわれる自己に対する特質のことである。そして「性格」とよばれる諸特性の集合体が「自己」である。「自己」もまた，学習Ⅱの所産であり，同時に，コンテクストの中での行動のしかたであり，自己をも含むコンテクストのとらえ方であり，体験世界を形づける「型」なのである。そして体験世界と自己は不可分の関係にある。われわれは，学習Ⅱを通して，体験世界や自己を紡いでいく。切れ目なく連続する行為・経験・事象の流れを区切る学習Ⅱという行為は，意味あるものとして世界を統覚する

為の行為である。まとまりを持った一つの世界に存在すること，また，理解可能な世界に存在することがわれわれにとって重要なことであることは疑いようがない。それでは，学習Ⅱ（コンテクスト学習）に障害をもつ，自閉症スペクトラム当事者の体験世界に同一性やまとまりを持たせるものは何になるのか，そこに常同行動があるのではなかろうか。常同行動が自閉症スペクトラム当事者独自の体験世界における同一性（自己と環境とのパターン生成）を繋ぎとめるものとしてあるとき，体験世界とそこに生きる自己の存在を確認する行為として重要な働きをするものだといえる。

6－3. 社会システムと自閉症スペクトラム

自閉症スペクトラムという障害について，社会システムに視野を広げて捉えてみたい。自閉症スペクトラムの原因論について，さまざまな視点から，多くの仮説が示され，仮説に基づく治療が展開されている経緯は，冒頭で触れた通りである。これらの知見は，医学的な現象として切り取られた学習Ⅱの産物といえよう。そして，それらの仮説は隆盛しては衰退することを繰り返す。これはコンテクストの切り取り方において，句読点を変えつつも，学習Ⅱのレベルに留まるそのあり様である。では，個々の個別的な経験が，医療的コンテクストとして切り取られるプロセス（個人システムの学習Ⅱ）に何があるのか，ベイトソンは「コンテクストマーカー」という概念を導入し，説明している（Bateson, 1972)。「コンテクストマーカー」とは，コンテクスト識別の為の具体的なシグナルのことを指す。それでは，自閉症スペクトラムを医学的コンテクストとして識別する手がかりは何になるのか。おそらく，その多くは診断基準に示される特徴的な行動（シグナル）であろう。つまり，DSM−5は，あらゆる精神疾患の「コンテクストマーカー」としての働きがあるといえる。フーコーは，このようなに個人的な経験を一般的な意味の秩序のなかへと回収する言語の作用について権力作用を見出している(Foucault, 1980)。ベイトソンは情報がもつ拘束性を主題にする一方で，言語については多くを語らなかった。しかし，学習Ⅱを，認識と行動のパターン生成とするなら，言語のもつ拘束力も無視できないだろう。一方で，言語のみで社会を構成すると仮定したならば，言葉をもつ人間が世界の中心をなすこととなり，ベイトソンが重視し続けた「生物＋環境」が一つの単位となったシステムを見失うこととなる。医療的コンテクストを構成する学習もまた，階層レベルの異なる多重の学習プロセスなのである。

6－4. 自閉症スペクトラムと治療システム

ベイトソンの学習理論では, セラピーが目指すところを学習Ⅲとしている。学習Ⅲとは「“身にしみついた”前提を引き出して問い直し，変革を迫る（Bateson, 1972)」ことである。自閉症スペクトラムにおける学習Ⅲの成立は，自閉症スペクトラム当事者の自伝的な書籍からみてとれる。そこでは，自閉症スペクトラムである自己に言及しつつ，体験世界の記述がなされ，自閉症スペクトラムの体験世界の切り取り方を伺い知ることができる。それらの記述は普通とされる社会と対比するスタイルをとることが多い。普通とされる見方を知り得ていることから，これらの著書は学習Ⅲの産物であろう。体験世界の学習Ⅲについては，個々の当事者の特性によるところではあるが，それらの著書を記したほとんどの著者は，多くの困難を困難としてで

はなく“違い”として切り取り，自己の世界を生きる姿勢を示している。

自閉症スペクトラムの治療において，上記のような学習Ⅲを目指す方向性はとられていない。多くの支援が，適応的な言動や問題行動についてのアプローチを中心としている。しかし，それらの支援の中には，自閉症スペクトラムの体験世界に言及するものも少なくない。例えば，ＴＥＡＣＣＨプログラムでは，自閉症の人々の行動様式を文化の一つとして捉え，理解しようとするという基本姿勢が示されている（佐々木，2008）。また，インリアル・アプローチでは，対象児独自のコミュニケーションを理解するところから始まる（竹田，1994）。これらは，支援者側の既存の自閉症スペクトラム観や治療観を相対化する可能性を開いているものであり，学習Ⅲを要請するものである。支援者としての専門性について，松本（2017）は「学習Ⅱの枠組みでの援助者が，自らの専門性をどう捉え振り返り調整するか，という反証的／再帰的姿勢が，学習Ⅲと考えられる」としている。支援者もまた，自閉症スペクトラム当事者にとってはシステムの一部としてある。支援者の学習Ⅲが，自閉症スペクトラム当事者の体験世界の広がりを支えるものになりうるのである。

7. おわりに

本論では，自閉症スペクトラムをベイトソンの学習理論で記述することで，既存の障害観や支援観について，違う見方を提案してきた。ベイトソンの学習理論では，それ自体が学習Ⅲとするところであり，二元論的な思考習慣を相対化することへと繋がるものである。

障害者と共に生きる社会を作るとき，制度や設備面が整ったところで境界線がなくなる訳ではない。従来のものの見方で，共生社会を形づけようとすると，障害者にとっての「共生」を見失ってしまうこととなる。障害者と共に生きる社会を目指すとき，障害者が，われわれの社会に適応しやすい環境を整えることや，われわれの社会のスキル獲得を目指すといった側面だけでは，境界線の上に描かれた，われわれの社会が認める「共生社会」が出来上がっていくだけである。境界線がなくなること，それは，われわれが既存の枠組みから離れてみる，その試みが必要なのである。

注）「障害」の標記について

障害の「害」という漢字の表記については平仮名で表現されることが増えているが，現在の法律上の正式表記では「障害」という表記が用いられているため，本論では「障害」「障害者」に統一している。

文　献

Baron-Cohen,S,Leslie,A,M,&Frith,U.（1985）Doestheautisticchildhaveatheoryofmind7,Cognition.
Bateson,G.（1972）Steps to an Ecology of Mind .Ballantine Book. 佐藤良明（訳）.
精神の生態学　新思索社.
CurciqF.(1978)SensonmotorfUnctioningand.

communicationinmuteautisticchildrenJoumalofAutismandChildhoodSchizophrenia,
Frith,U.（1989）Autism: explaining the enigma, Basil Blackwell. 冨田真紀・清水康夫（訳）自閉症の謎を解き明かす．東京書籍.
橋三郎･大野裕･染矢俊幸．（監訳）(2014) DSM−5精神疾患の診断･統計マニュアル．医学書院.
東田直樹（2016）自閉症の僕が飛び跳ねる理由　角川文庫.
Ｉ．Mバーマン(1989)デカルトからベイトソンへ－世界の再魔術化－　柴田元幸(訳)．国文社.
教育課程企画特別部会（2015）特別支援の教育と課題.
松本宏明（2017）オープンダイアローグが照らし出す臨床心理学の専門性－「不確かさに耐えること」をベイトソンの学習Ⅲとして捉える試み－．志學館大学人間関係学部研究紀要. 13-30
Rizzolatti,O,Fogassi,L,&Gallese,7（2001）Neurophysiologicalmechanismsunderlyingthe understandingandimitationofactionNature ReviewsNeuroscience,
佐々木正美（2008）自閉症児のためのTEACCHハンドブック．ヒューマンケアブックス.
障害児支援の在り方に関する検討会（2014）今後の障害児支援の在り方について（報告書）～「障害支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか　～
下山　晴彦・遠藤　利彦・齋木　潤・大塚　雄作（編集）(2014) 誠信心理学辞典［新版］．誠信書房.
竹中均（2008）自閉症の社会学－もう一つのコミュニケーション論－　世界思想社.
竹田　契一･里見　恵子（1994）インリアル･アプローチ－子どもとの豊かなコミュニケーションを築く．日本文化科学社.